The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	妬みの生起における予期の役割
Author(s)	坪田, 雄二
Citation	対人社会心理学研究. 2011, 11, p. 101-108
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9803
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

対人社会心理学研究, 11, 2011

妬みの生起における予期の役割

坪田雄二(県立広島大学生命環境学部)

本研究は妬みに関する実証的研究を展望したものである。妬みの定義や類似概念である嫉妬との関連性、妬み感情の構造、妬みの生起にかかわる要因、妬みの影響に関して概観した。そして妬みの生起に及ぼす予期の役割について指摘した。

キーワード: 妬み、社会的比較、自尊感情、原因帰属、予期

人間の他者との比較行動について社会心理学では社会的比較の問題として取り上げてきた。Festinger(1954)は社会的比較理論として、この行動の生起条件や機能・効果などをまとめている。Festinger(1954)では、どのような他者が比較対象として選ばれるのか、比較の結果、何がわかるのかなどの認知的な部分に焦点を当てているが、認知面のみに他者との比較の影響が現れるわけではない。他者と比較することで感情面も影響を受ける。このような他者とのかかわりの中で感じる感情を社会的感情といい、今回取り上げる妬み(envy)もその中の 1 つである。

妬みとは何か

(1) 社会的比較によって生じる感情における妬みの位置づけ

Smith(2000)は、社会的比較の状況を比較の方向性、感情の性質、注意の方向の 3 つの観点で分類し、社会的比較にかかわる感情を分類するモデルを提唱している(Figure 1)。比較の方向性とは自分より優れた者と比較するか(上方比較)自分より劣った者と比較するか(下方比較)を示し、感情の性質とは他者の感情と自分が感じる感情が同質のものか(同化的)異質のものか(対比的)を示し、注意の方向は注意が自己に向けられているか(自己焦点)他者に向けられているか(他者焦点)自他共に向けられているか(自他焦点)を示している。社会的比較の研究において、自分よりも優れた他者と比較するか劣った他者と比較するかは社会的比較を分類する次元としてよく使われるものであるが、これが比較の方向性にあたる。ただし、上方比較をすれば必ずしも否定的な感情だけを感じるわけでもなく、比較の結果、もっと頑張ろうといった鼓舞を感じる場合もある。下方比較も同様に、常に肯定的な感情ばかりではない。そこで出てくる次元が感情の性質である。この 2 次元により上方同化的感情、上方対比的感情、下方対比的感情、下方同化的感情の 4 つに分類できる。また、これら 4 つの感情の中でもそれぞれの状況で感じる感情には違いがあると思われる。例えば、劣った他者と比較してその他者と同じように否定的な感情を感じたとしても(下方同化的感情)、ある時は自分も将来同じようになるのではないかといった恐怖を感じたり、かわいそうだといった憐れみを感じたりする場合もあろう。それにかかわるのが注意の方向である。下方同化的感情の中で自分に注意を向けた場合は恐怖や困惑が、他者に注意が向いた場合は憐れみが生じるというわけである。このような 3 つの要因から社会的比較によって生じる感情を分類するのが Smith(2000)のモデルである。このモデルによると妬みは、上方、対比的、自他焦点の感情に位置づけられる。つまり、妬みは自分が不快な感情を感じ、少なくとも他者は不快ではない感情を感じている(多くの場合他者は優れた業績などをあげており基本的には快的な感情を感じていると思われる)という意味で対比的であり、また、常に他者の方が優れた結果を示しているため上方比較となる。またこのような状況では、妬みばかりではなく抑うつや恥ずかしさを感じたり、怒りを感じたりする場合も考えられる。これらの感情の差異は注意の焦点で説明される。抑うつや恥を感じるのは、その際注意の焦点が自己に向けられる場合であり、怒りを感じるのは他者に焦点が向けられる場合である。妬みの場合は、自他共に注意が向けられているため、自分に注意が向けられた際に喚起されやすい抑うつや恥などの比較的穏やかな感情と他者に注意が向いた際の怒りなどの激しい感情が混在する複合感情と考えられる。

(2) 妬みと嫉妬の関係

妬みに類似した感情として嫉妬が取り上げられ、これらの感情の違いに関して検討も進められている。両者には概念的な定義からは明確な違いが存在する。1 つは感情の強度であり、嫉妬は妬みよりも激しい感情で、嫉妬は暴力的、復讐的な行動に結びつくが、妬みは暴力的な行動に結びつかない(Sullivan, 1956)。また、嫉妬は他人の方が自分より優位にある、あるいは、優位になりそうだということを認めた上で積極的にそれを排除し蹴落としてやろうとする激しい感情であり、妬みは他人が優位でその他人にとてもかなわないと思ったあきらめの態度である(詫摩, 1975)などのように、妬みは嫉妬に比べてより弱い感情であると述べられている。また、もう 1 つの違

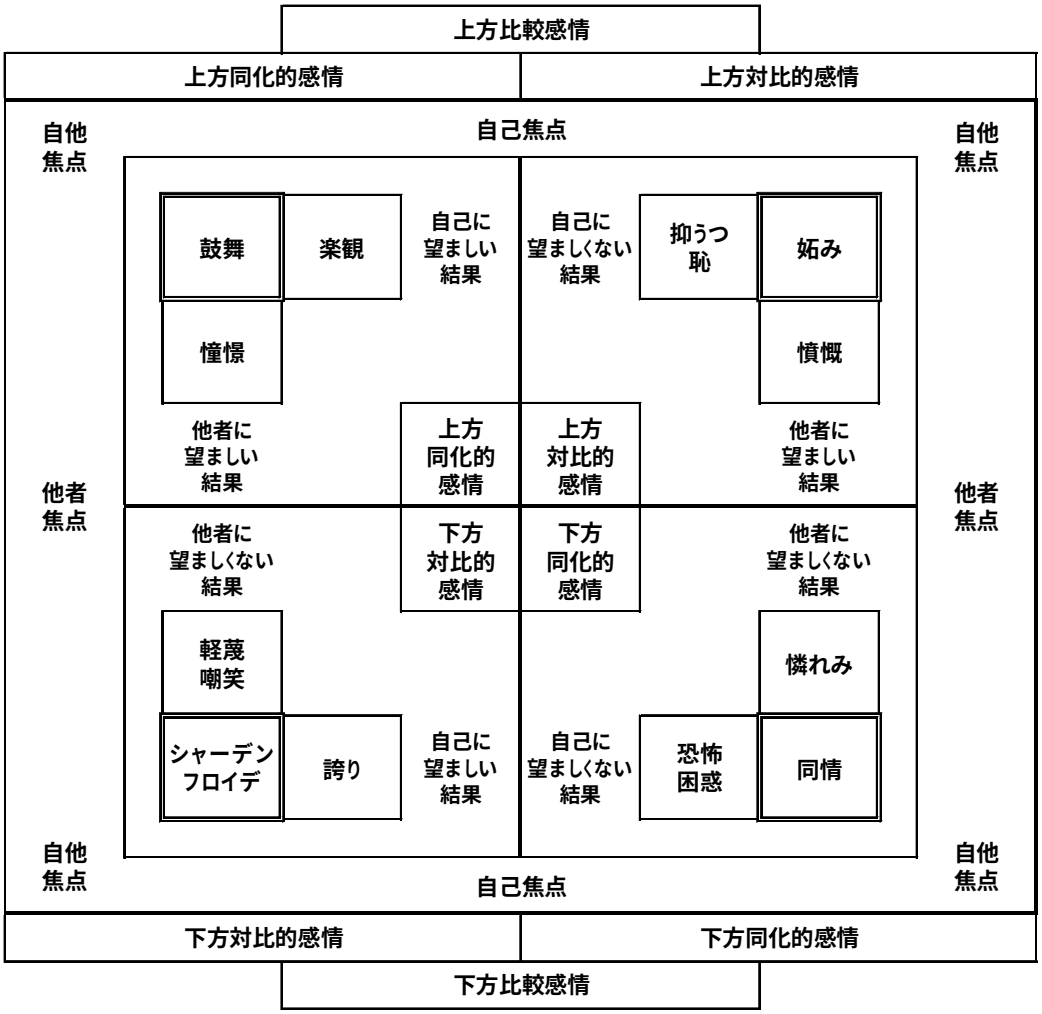

Figure 1 社会的比較における感情の構造(Smith, 2000 より作成)

いはそれぞれの感情が生起する状況の差異である。嫉妬は自分にとって非常に重要で価値あるものを持っており、それを誰かが自分から奪い去るのではないかという恐れを感じるときに生じる感情と定義され、妬みは自分が非常に欲しいと思っているが手に入れていない何かを他者が持っていることを知覚したとき生じる感情と定義されている(Schimmel, 2008)。嫉妬の場合、非常に重要で価値あるものとして特定の他者との関係が想定されることが多く、妬みの場合は手に入れていない何かとして業績や能力などが想定されることが多い。そのため、嫉妬は三者関係で生じ、妬みは二者関係で生じるとする見解もある。しかし、その違いの本質は状況における人数ではなく、嫉妬は失うことへの恐怖、妬みは持ちたいという憧憬にあると考えられる。

一方、日常的な場面では妬みと嫉妬はさほど区別して使われていないという報告もある。Parrot & Smith(1993)は、妬みと嫉妬の状況を収集しその状況の分析を行ったところ、嫉妬状況として挙げられたものの中の約 6 割は上記の妬みの定義に合致する状況であるが、妬み状況として挙げられたものでは約 1 割しか嫉妬の定義に合致する状況はみられないことを明らかにしている。すなわち、日常的な用語としては嫉妬は妬みを含む意味で使われ、より広い意味の言葉であるということであろう(Figure 2)。このような観点から、嫉妬を社会的関係における嫉妬(social-relation jealousy)と社会的比較による嫉妬(social-comparison jealousy)に分類し、妬みを後者のタイプの嫉妬とするという考え方も出されている(Bers & Rodin, 1984; Salovey & Rodin, 1984, 1986)。80 年代、90 年代には妬みを社会的比較によって生じる嫉妬として検討した研究もあるが、その後はこの言葉を使った研究もみられず、本稿では、社会的比較による嫉妬を妬みと同義にとらえていく。

また、妬みを 2 つのタイプに分ける考え方も見受けられる。研究者によって命名に違いはあるものの、基本的には敵意を含まない妬みと敵意を含んだ妬みの 2 つに分ける考え方である。これらについて、Shengold(1994)

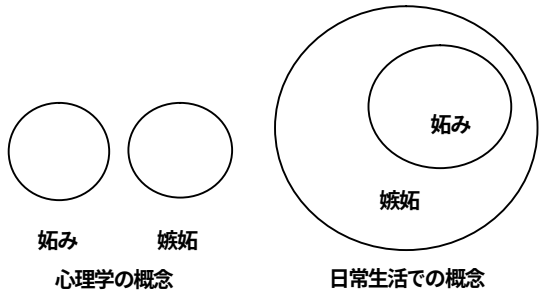

Figure 2 妬みと嫉妬の概念の違い

は良性妬み(benign envy)と悪性妬み(malignant envy)、Neu(1980)は憧憬的妬み(admiring envy)と悪意的妬み (malicious envy)、Smith & Kim(2007)は良性妬み(benign envy)と根源的妬み(envy proper)と呼んでいる。澤田(2006)は、これらの分類は日本語における羨望と妬みに対応しており、英語における envy には日本の羨望(敵意なしの妬み)と妬み(敵意ありの妬み)の両方のニュアンスが内包されていると述べている。このように、英語には羨望と妬みの違いを意識せず同じ言葉で表し、日本語では、羨望と妬みといった別々の言葉が用意されていることから考えると、日本人にとってこれらの感情はいずれも身近な感情として意識されてきたことが推測される。

妬みに関する研究の概観

Smith & Kim(2008)は妬みに関する研究を以下の 4 つに分類している。1 つ目は、宗教、哲学、進化心理学の観点から妬みを考える立場である。2 つ目は、社会心理学の観点から対人関係の中での妬みを考える立場、3 つ目は、産業･組織心理学、消費心理学、生理心理学などの観点から妬みを考える立場で、4 つ目は、健康心理学、臨床心理学の観点から妬みを感じる人の身体的、精神的健康を考える立場である。社会心理学の立場からの研究は後ほど詳しく述べていくので、ここではそれ以外の 3 つについて簡単に解説する。

初めに、1 番目の立場の研究は、人はなぜ妬みを感じるのか、人にとって妬みはどんな意味を持つのかを明らかにすることを基本命題としているものといえる。進化心理学では、妬みが適応進化の過程の中で獲得されたものならば妬みを感じることが適応につながるはずであるという考え方から、妬みのもつ意味を明らかにしようとしている。例えば、1 つの考え方として次のようなものがある。生存のためには必要最低限の資源の獲得が必要であるが、その資源は周りの者との競争によって獲得しなければならず、その競争に敗れた場合は生存が脅かされる。妬みは他者との比較において自己が劣勢にある状況で感じる感情であり、この状況は競争での敗北を予感させる。それを回避するための行動の変化や動機づけの高まりを生み出す警報システムとして妬みは機能する。これ以外にも繁殖戦略の一環として、妬みの性差が生じるといった考え方も提出されているが、いずれにせよ、この領域の研究は始まったばかりであり、今後の研究の蓄積が待たれる領域といえよう。

続いて、3 番目の立場の研究は、低い職務満足や集団生産性、高い離職率･転職率(時には高い生産性)と組織内で人が感じる妬み(workplace envy)との関連を検討しているものがある。ここでは、組織内の妬みは組織の中には変えるべき何かが存在することのサインと考えられている。また、妬みを喚起することである商品の購買意欲を高めようとする販売方略(セレブリティ･モデル)や、脳内の活動と妬みの関連を検討するといったものなどもこれに含まれる。

最後に、4 番目の立場の研究は、妬みを感じやすい人は人生における満足感を感じることが少なく、うつ傾向や自己愛傾向を持つなど、妬みと対人関係や社会的地位や心理的健康状態との関係を検討したものがある。

社会心理学の観点からの妬みの検討

ここからは社会心理学の領域で行われてきた妬みに関する研究をみていく。この領域でも多くの課題が検討されているが、ここでは、妬みの構造、妬みの生起にかかわる要因、妬みの影響などに関してまとめていく。

(1) 妬みの構造

上述のように、妬みは単一の感情ではなく、いくつかの感情が同時に生じる複合感情と考えられている。そのため、妬みが生じる状況でどのような感情が生起しているのかという妬みの構造について検討が行われている。澤田(2005)は小学生、中学生を対象とし、過去の妬み生起場面と仮想場面の 2 種類の状況を用いて、そこで感じる感情の構造を明らかにしている。その結果、憎らしい、腹が立つ、悔しいなどの他者に向けられる感情と苦しい、悲しいなどの自己に対する感情を見出し、敵対感情、苦痛感情、欠乏感情の 3 因子を抽出している。また、坪田(1990)は大学生を対象とし、仮想場面を用いて同様の検討を行い、あきらめ･無力感、敵意･怒り、驚き･当惑、憧れ･劣等感の 4 因子を抽出している。驚き･当惑の因子以外は澤田(2005)の結果と同様の結果と解釈できる。驚き･当惑の因子が後者の結果のみでみられたのは、前者の研究では、そもそも評定された感情語にこれらの感情にあたるものが含まれていなかったこと(前者の研究では嫌な気持ち(negative emotion)に限定して感情を収集しており、その結果、比較的中立的(neutral emotion)であると考えられる驚きなどの感情が含まれなかったこと)が原因と思われる。また、Shaver, Schwartz, Kirson, &

O'Connor(1987)は参加者に 135 の感情語を類似－非類似の観点から分類させ、感情の分類を行っているが、妬みは6つの基本感情(愛情、歓喜、驚き、怒り、悲しみ、恐怖)の中で怒りに近い感情として分類している。また、Parrot(2001)は妬みの感情体験として切望(longing)、劣等感(inferiority)、対象に焦点化された憤慨(agent-focused resentment)、全般的な憤慨(global resentment)、罪悪感(guilt)、憧憬(admiration)を挙げている。以上のことをまとめてみると、妬みの感情は基本感情として怒りに近いもので、他者との比較の結果、自分に注意が向くと悲しみなどの苦痛の感情をより感じやすく、他者に向くと怒りや憤慨などの敵意の感情をより感じやすい複合感情といえるようである。

(2) **妬みの生起にかかわる要因**

これまで検討されてきた妬みの生起因として多くのものがあるが、それらは大別すると、妬みを感じる個人の特性や認知に関する要因、比較次元や比較他者との関係性に分類できる。

1) **個人内の要因** (a)自尊感情 妬みの関連が検討されてきた個人特性の中で、最初に取り上げるのは自尊感情(self-esteem)である。社会的比較における研究では、自尊感情の低い者は比較を避ける傾向にあることが示されており(高田, 1971)、この現象は自尊感情の低い者は自分が劣っているという結果により脅威を感じるためであると解釈されている。このように妬みの生起の前提となる社会的比較においても自尊感情が関連していることや、妬みだけでなく嫉妬や抑うつ、適応などとの関連においても自尊感情は古くから検討されている。また、妬みとよく似た嫉妬の研究では、恋愛関係における嫉妬の生起モデル(White, 1981a)において嫉妬の生起因の 1 つとして自尊感情の喪失が取り上げられている。このようなことから考えても自尊感情と妬みの関係を検討することは十分意味のあることであろう。

これまでの妬みと自尊感情のレベルの関係を検討したものをみると、妬みと自尊感情に関連はみられないものや自尊感情の低い者ほど妬みを強く感じるものなど、その結果は一致していない(坪田, 1990, 2002)。また、嫉妬と自尊感情の関係を検討した研究も多く、それらも同様に一貫した結果は得られていない(Buunk, 1982; 池上・荒川, 2001; Mathes & Severa, 1981; Stewart & Betty, 1985; White, 1981b; など)。一方、自尊感情については、そのレベルだけでなく、安定性にも注目して検討が行われている。自尊感情の安定性とは、時系列的、文脈的な変化で生じる自尊感情の揺らぎの大きさと定義できる(Rosenberg, 1986)。この安定性は、学業達成や動機づけ、怒りや抑うつとの関連性が報告されていることからもわかるように、自尊感情のレベルと同様に人間の行動や感情に影響する要因といえる(Kernis, Grannemann, & Barclay, 1989; Kernis, Grannemann, & Mathis, 1991; Kugle, Clements, & Powell, 1983; Waschull & Kernis, 1996)。また、Wells & Sweeney(1986)は自尊感情の安定性を現象的安定性(phenomenal stability)と統計的安定性(statistical stability)に分類している。現象的安定性とは Rosenberg(1965)の作成した自尊感情安定性尺度を用いて測定したものを指し、統計的安定性とは自尊感情を複数回測定し、その尺度得点の変動を指標とするものを指す。この現象的安定性と自尊感情のレベルの両方を考慮して妬みとの関連を検討したものに坪田(2002)がある。ここでは、性、自尊感情のレベル、安定性の主効果、性と自尊感情のレベル、性と安定性の交互作用効果が報告され、男性よりも女性の方が、自尊感情の高い者よりも低い者の方が、安定的な者よりも不安定な者の方が妬みを強く感じることが示されている。そして、女性では自尊感情のレベルおよび安定性による違いはみられないが、男性では、自尊感情の低い者ほど、また、自尊感情の不安定な者ほど妬みを強く感じることが示されている。また、恋愛関係における嫉妬を対象として自尊感情のレベルと現象的安定性の効果を検討した研究(池上・荒川, 2001)もあり、ここでは嫉妬の強さそのものではなく、恋人との関係を修復しようとする建設的行動に差がみられ、不安定な者ほどこのような行動に従事しやすいことが報告されている。このように、自尊感情の現象的安定性が妬みに影響することを示した研究もあるが、研究数も少なく安定した結果とはいえない状況である。また、自尊感情の安定性のうち統計的安定性に関する検討は行われておらず、この領域でも研究が必要であろう。

(b)原因帰属 個人内要因として次に取り上げるのは、これまでの対人感情研究の中でも検討されてきた原因帰属である。帰属研究では、帰属される原因の分類次元として内在性、安定性、統制可能性を取り上げ、どのような原因に帰属するかによってその後に生じる感情が異なることが指摘されている。例えば、内的帰属は自尊心や誇りに結びつき、失敗を統制不可能原因に帰属した場合は怒りに結びつくなどが示されている(Weiner, 1985)。この原因帰属と妬みの関連性を検討したものに、Mikulincer, Bizman, & Aizenberg(1989)と坪田(1993)がある。Mikulincer et al.(1989)は、過去の経験の中から他者が優れた結果を示した状況を想起させ、その際の感情や原因を評定させたところ、内的帰属において妬みを強く感じ、内的帰属の中でも不安定な原因ほど妬みが強いことを報告している。しかし、坪田(1993)は、内在性、安定性、原因の方向という 3 つの次元を操作した 2 種類の仮想場面を提示してその際の感情を測定したところ、外的帰属において妬みが強いことを報告している。このように 2 つ

の研究結果は矛盾する結果を示している。これについて澤田(2006)は、妬み喚起領域の違いが原因であろうと推論している。すなわち Mikulincer et al.(1989)は過去の妬み場面を自由に想起させているため、最も印象に残った場面が想起されたならば自分の落ち度や失敗による場面(より内的帰属がされやすい場面)がより想起されやすいことが予想される。一方、坪田(1993)は主人公がある程度努力していたにもかかわらず失敗する場面(より外的帰属がされやすい場面)が設定されている。つまり検討した領域がそもそも内的帰属あるいは外的帰属につながりやすい領域だったことがこの矛盾した結果につながったということである。また、これ以外の原因も考えられる。それは帰属と帰属の表明の違いという原因である。坪田(1993)は、主人公の帰属を「このような結果になったのを～だからだと思いました」と記述している。これを、主人公の帰属そのものと認識するか、主人公がそう言ったと認識するかは読み手(実験参加者)に委ねられている。もし主人公の発言と認識された場合は、例えば、自分の努力が足りなかったと言った時、その人が自分の能力不足を隠そうとしてそういったのだろうと解釈する場合も出てくるであろう。そうなると外的帰属条件をそのまま外的帰属と考えてよいかどうか不明となってしまう。以上のような 2 つの原因が帰属の妬みの喚起に与える影響における矛盾した結果の原因として推論できる。1 番目の原因に対する方策については、想起されやすい状況が内的帰属につながりやすいのであるとすれば、複数の状況を想起させ、その際の想起の順で最上位の状況と最下位の状況、それぞれで帰属様式と妬みの喚起の関連性の強さを検討し比較することで検討可能かもしれない。また、2 番目の原因については、提示する刺激文に帰属情報を含めず、状況だけを提示し、その際の帰属を実験参加者に行わせ、その際の帰属様式と妬みの喚起の関連性を検討することで対応可能であろう。

(c)獲得可能性　澤田(2006)は状況認知にかかわる要因として獲得可能性を挙げている。妬みの状況は定義からもわかるように、欲しいと思っているものを他者が持っている状況(自分が他者に負けている状況)において喚起される。その際、その欠けているものを将来自分も持てるだろうという認知が獲得可能性にあたるものである。Ben-Ze've(1992)は、自分がとても及ばないと認知するとそれは妬みではなく憧れと考えられると述べているが、このとても及ばないという認知が獲得可能性にあたるものであり、澤田(2003)は獲得可能性が高いほど妬みを強く感じることを報告している。

2) **比較次元、比較他者との関係性**　ここで取り上げる要因は、自己評価維持モデル(Tesser, 1988)の枠組みで検討されたもので、比較次元の関連性、比較他者との心理的近さが妬みの生起にかかわる要因として指摘されている。自己評価維持モデルでは人は自分の肯定的な自己評価を維持しようと動機づけられると仮定し、自己評価が維持される状況を遂行結果(performance)、関連性(relevance)、心理的近さ(closeness)の 3 つの変数を使って説明している。そして、それが満たされる状況として反映過程と比較過程の 2 つが挙げられている。反映過程とは自分にとって心理的に近い他者が自分にとってさして重要でない次元において優れた結果を示す状況(遂行結果：自分＜他者、関連性：低、心理的近さ：高)で、比較過程とは自分にとって心理的に近い他者が自分にとって重要な次元で劣った結果を示す状況(遂行結果：自分＞他者、関連性：高、心理知的近さ：高)である。3 つの変数の組み合わせがこれら 2 つの過程以外の場合は自己評価が脅かされる、あるいは、自己評価に何の影響も与えないと考えている。以上のことを考え合わせると、妬みを感じるのは、単に自分の遂行結果が他者のそれを下回るだけでは不十分で、そこで比較された次元は自分にとって関連性の高いものでなくてはならず、またその比較他者は自分にとって心理的に近い人物である必要があることが推論される。このような観点から検討したものに、Salovey & Rodin(1984, 1986) や Tesser & Collins(1988)がある。これらの研究では上述の仮説を支持する結果が得られている。

(3) 妬みの影響

妬みを感じることで人はどのような影響が出てくるのだろうか。一般には妬みを感じることでその他者の悪口を言ったり、攻撃したり、あるいは破壊行為を行ったりといった否定的な結果がイメージされるかもしれない。しかし、Foster(1972)は妬みが肯定的、否定的両方の機能をもつことを指摘している。肯定的な機能とは、妬みを感じることで自分の足りない部分を知り、その改善に向けて努力するといった動機づけが生じることを指す。とはいえ、精神的病理や精神分析の領域でも妬みが検討されていること(例えば、Horney, 1937; Klein, 1957 松本訳 1975)からみても一般的には否定的な機能の面に向けられる関心が強く、「妬み＝否定的」の結びつきは強いようである。ただ、肯定的な面に対する注意も忘れてはならないだろう。

ここでこれまでの妬みの影響に関して検討された研究を紹介する。Silver & Sabini(1978)は、相手を貶めたり相手の邪魔をしたりといった方法が妬みの結果として生起しやすいことを示している。Salovey & Rodin(1988)は、妬みを表さないようにしたり自分自身の力だけで対処しようとしたりする「自己信頼」、自分の良いところを探して低下した自尊心を維持しようとする「自己補強」、こんなところで負けてもたいしたことではないと自己の関与度を

下げる「選択的無視」の 3 つの方略を妬みの影響として報告している。Vecchio(1997)は職場での妬みの対処方略の分類次元として「破壊的－建設的」、「他者にかかわる－かかわらない」の 2 次元を報告している。澤田・新井(2002)は小学生、中学生の妬みへの対処方略として、悪口を言いふらしたりその人を叩いたりといった「破壊的関与」、何もしないで忘れようとしたり自分にとってあまり重要でないと考え直したりといった「意図的回避」、誰かに相談したり自分なりに努力したりといった「建設的解決」を指摘している。Silver & Sabini(1978)の知見は、Vecchio(1997)の破壊的で他者にかかわる対処、澤田・新井(2002)の「破壊的関与」と対応するものであり、Salovey & Rodin(1988)の「自己信頼」は、Vecchio(1997)の建設的で他者とかかわらない対処、澤田・新井(2002)の「建設的解決」と対応し、Salovey & Rodin(1988)の「選択的無視」は澤田・新井(2002)の「意図的回避」に対応するものと考えられる。また、この「選択的無視」の方略は自身の関与度を下げることで妬みに対応しようとする方略であり、これは妬みの生起にかかわる要因で指摘した比較次元の関連性の知見と合致する結果とも考えられる。すなわち、比較次元の関連性(自分にとっての関与度)が高いほど妬みを強く感じてしまうため、関与度を下げることで今感じている妬みを低減させようとする方略と考えられるからである。

一方、神村・海老原・佐藤・戸ヶ崎・坂野(1995)は、ストレスへのコーピングの分類として問題解決に焦点をあてる対処、気分の調節に焦点をあてる対処、回避する対処を挙げている。妬みが生じる状況は自分にとって関与度の高い次元で心理的に近い他者が自分より優れたパフォーマンスを示している状況であるため、ストレスを感じる状況とみなすことができる。そのため、ストレスへの対処と妬みへの対処には類似性がみられることが推測でき、ストレスにおける問題解決に焦点をあてる対処は妬みにおける「建設的解決」に対応し、ストレスにおける気分の調節に焦点をあてる対処は妬みにおける「意図的回避」の対処に対応するものと考えられる。そして、ストレスへの対処に対応していない「破壊的関与」の方略は妬みにおける対処の特徴といえるものかもしれない。そのことが前述の「妬み＝否定的」の結びつきにかかわっているのかもしれない。

まとめ

ここまで、社会的比較によって生じる感情である妬みの生起にかかわる要因についてまとめてきた。ここでは、妬みの生起にかかわる未検討の要因としての予期について考えてみたい。Smith(2000)の分類は社会的比較によって生じる感情を分類することを目的としたモデルであり、妬みの感情そのものを取り上げたものではない。そのため、妬みが社会的比較によって生じる感情であることは示されても、なぜ妬みが生じるのかについては不十分な部分がある。例えば、妬みは上方対比的感情であることはこのモデルで示されるが、なぜ上方比較の際に同化的感情と対比的感情が生み出されるのか、その違いは何によって生まれるのか、といった部分は不明な点がある。しかし、妬みの生起を考える際には何が妬みを生じさせるのかという問題が重要である。この問題に対しては、妬みの生起にかかわる要因のところで述べたものが現状での回答となろう。これらの要因の中で、安定した結果を示している要因は、獲得可能性、比較次元の関連性、心理的な近さの要因である。一方、自尊感情と原因帰属は結果の方向性が研究間で一致しておらず安定した結果とはいえない。では、これらの要因に共通するものは何であろうか。獲得可能性とは、将来それを自分も持てるであろうという認知のことであり、これは将来における認知、すなわち予期にあたるものであろう。また、比較次元が自分にとって関連性の高い場合、すなわち重要な場合には、自他の能力の差などの多くの情報を持っていることが予想される。そして、心理的に近い他者であれば、上述のような自他の能力差などについてもよく知っているであろう。もしそうであるならば将来の自他のパフォーマンスの状況(自分の方が優れた結果をあげられるか、他者の方が優れた結果をあげられるか)を推測できることになる。これも予期に当たるものである。このように考えると妬みが生起する状況とは、将来の自他のパフォーマンスに対する予期が可能である状況といえる。一方、妬みの構造のところで指摘したように、坪田(1990)は妬みの構成要素として驚きを見出している。驚きの感情は予想が覆されたとき、あるいは予想を超えた結果を示されたときに感じる感情である。であるならば、妬みの状況ではその人物は何らかの予期をもっており、その予期が覆された状況といえるのではないだろうか。このようなことを考え合わせると、妬みの生起には予期が不可欠であり、他者との比較において自分の方が優れている、あるいは同等であるという予期が裏切られた状況で喚起される感情といえるのかもしれない。

また、前述のように妬みには良性妬みと悪性妬みといった 2 つのタイプが存在する。ともに他者に比べて自分の方が劣っている状況ではあるが、前者は他者の優れた業績を素直に喜んだり、時にはとてもかなわないと諦めたりする羨望にあたり、後者はそれをなんとしても手に入れようとする本来の意味の(日本語における)妬みである。もしかすると、この両者の差を生み出す要因が予期なのかもしれない。つまり、何の予期も生じない、あるいは予期に沿った結果のような状況で感じる envy は良性妬み

であり、予期が可能で、それが覆されるような状況で生じる envy は悪性妬みになることも考えられる。今後の妬みに関する研究の中で、状況における予期の働きを検討することには意味があるのではないだろうか。

引用文献

Ben-Ze've, A. (1992). Pleasure-in-others'-misfortune. *Iyyun: The Jerusalem Philosophical Quarterly*, **41**, 41-61.

Bers, S. A., & Rodin, J. (1984). Social-comparison jealousy: A developmental and motivational study. *Journal of Personality and Social Psychology*, **47**, 766-799.

Buunk, B. (1982). Anticipated sexual jealousy:its relationship to self-eateem,dependency, and reciprocity. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **8**, 310-316.

Festinger, L. (1954). A theory of social comparison process. *Human Relations*, **7**, 117-140.

Foster, G. (1972). The anatomy of envy: A study in symbolic behavior. *Current Anthropology,* **13**, 165-202.

Horney, K (1937). *The neurotic personality of our time*. New York.: W. W. Norton.

池上知子・荒川知歌 (2001). 対人感情の制御変数としての自尊心－恋愛における嫉妬感情の場合－ 日本心理学会第 65 回大会発表論文集, 885.

神村栄一・海老原由香・佐藤健二・戸ケ崎泰子・坂野雄二 (1995). 対処方略 3 次元モデルの検討と新しい尺度(TAC-24)の作成 筑波大学教育相談研究, **33**, 41-47.

Kernis, M. H., Grannemann, B. D., & Barclay, L. C. (1989). Stability and level of self-esteem as predictors of anger arousal and hostility. *Journal of Personality and Social Psychology*, **56**, 1013-1022.

Kernis, M. H., Grannemann, B. D., & Mathis, L. C. (1991). Stability of self-esteem as a moderator of the relation between level of self-esteem and depression. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 80-84.

Klein, M. (1957). *Envy and gratitude: a study of unconscious sources*. London: Tavistock Publications.
(クライン, M. 松本善男(訳) (1975). 羨望と感謝 無意識の源泉について みすず書房)

Kugle, C. L., Clements, R. O., & Powell, P. M. (1983). Level and stability of self-esteem in reaction to academic behavior of second graders. *Journal of Personality and Social Psychology*, **44**, 201-207.

Mathes, E. W., & Severa, N. (1981). Jealousy, romantic love, and liking: Theoretical considerations and preliminary scale development. *Psychological Reports*, **49**, 23-31.

Mikulincer, M., Bizman, A., & Aizenberg, R. (1989). An attributional analysis of social-comparison jealousy. *Motivation and Emotion*, **13**, 235-258.

Neu, J. (1980). Jealous thought. In A. O. Rorty (Ed.), *Explaining emotion*. Berkeley: University of California Press. pp. 425-463.

Parrot, W. G. (2001). The emotional experiences of envy and jealousy. In W. G. Parrot(Ed.), *Emotions in social psychology*. Philadelphia: Psychology Press. pp. 306-620.

Parrot, W. G., & Smith, R. H. (1993). Distinguishing the experience of envy and jealousy. *Journal of Personality and Social Psychology*, **64**, 906-920.

Rosenberg, M. (1965). *Society and adolescent self image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.

Rosenberg, M. (1986). Self-concept from middle childhood through adolescence. In J. Suls & A. G. Greenwald(Eds.), *Psychological Perspectives on the self.* Vol. 3. Hillsdale, NJ: Erlbaum. pp. 107-135.

Salovey, P., & Rodin, J. (1984). Some antecedents and consequences of social-comparison jealousy. *Journal of Personality and Social Psychology*, **47**, 780-792.

Salovey, P., & Rodin, J. (1986). The differentiation of social-comparison jealousy and romantic jealousy. *Journal of Personality and Social Psychology*, **50**, 1110-1112.

Salovey, P., & Rodin, J. (1988). Coping with envy and jealousy. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **7**, 15-33.

澤田匡人 (2003). 類似性と獲得可能性が妬み感情の喚起に及ぼす影響 日本心理学会第 67 回大会発表論文集, 984.

澤田匡人 (2005). 児童・生徒における妬み感情の構造と発達的変化－領域との関連および学年差・性差の検討 教育心理学研究, **53**, 185-195.

澤田匡人 (2006). 子どもの妬み感情とその対処 新曜社

澤田匡人・新井邦二郎 (2002). 妬みの対処方略選択に及ぼす、妬み傾向、領域重要度、および獲得可能性の影響 教育心理学研究, **50**, 246-256.

Schimmel, S. (2008). Envy in Jewish thought and literature. In R. H. Smith(Ed.), *Envy theory and research*. New York: Oxford University Press. pp. 17-38.

Shaver, P., Schwartz, J., Kirson, D., & O'Connor, C. (1987). Emotion knowledge: Further exploration of a prototype approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 1061-1086.

Shengold, L. (1994). Envy and malignant envy. *Psychoanalytic Quarterly*, **63**, 615-640.

Silver, M., & Sabini, J. (1978). The perception of envy. *Social Psychology*, **41**, 105-117.

Smith, R. H. (2000). Assimilative and contrastive emotional reactions to upward and downward social comparison. In J. Suls, & L. Wheeler (Eds.), *Handbook of social comparison: Theory and Research*. New York: Kluwer Academic/Plenum Publishers. pp. 173-200.

Smith, R. H., & Kim, S. H. (2007). Comprehensing envy. *Psychological Bulletin*, **133**, 46-64.

Smith, R. H., & Kim, S. H. (2008). Introduction. In R. H. Smith(Ed.), *Envy theory and research*. New York: Oxford University Press. pp. 3-16.

Stewart, R. A., & Betty, M. J. (1985). Jealousy and self-esteem. *Perceptual and Motor Skills*, **60**, 153-154.

Sullivan, H. S. (1956). *Clinical studies in psychiatry*. New York: W. W. Norton.

高田利武 (1971). 他人連合の決定因としての社会的比較

の効果 早稲田心理学年報, 3, 10-16.
詫摩武俊 (1975). 嫉妬の心理学－人間関係のトラブルの根源 光文社
Tesser, A. (1988). Toward a self-evaluation maintenance model of social behavior. In L. Berkowitz(Ed.), *Advances in experimental social psychology*. Vol.21. New York: Academic Press. pp. 181-227.
Tesser, A., & Collins, J. (1988). Emotion in Social reflection and comparison situations: Intuitive, systematic, and exploratory approaches. *Journal of Personality and Social Psychology*, 55, 695-709.
坪田雄二 (1990). 二者関係における嫉妬と羨望の比較－両感情の生起因と感情構造の観点から－ 広島大学大学院博士課程論文集, 16, 76-80.
坪田雄二 (1993). 原因帰属が社会的比較によって生じる嫉妬感情に与える影響 実験社会心理学研究, 33, 60-69.
坪田雄二 (2002). 自尊感情と嫉妬の関連性 広島県立大学論集, 6, 1-10.
Vecchio, R. P. (1997). Categorizing coping responses for envy: A multidimensional analysis of workplace perceptions. *Psychological Reports*, 81, 137-138.
Waschull, S. B., & Kernis, M. H. (1996). Level and stability of self-esteem as predictors of children's intrinsic motivation and reasons for anger. *Personality and Social Psychological Bulletin*, 22, 4-15.
Weiner, B. (1985). Attributional theory of achievement motivation and emotion. *Psychological Review*, 92, 548-573.
Wells, L. E., & Sweeney, P. D. (1986). A test of three models of bias in self-assessment. *Social Psychology Quarterly*, 49, 1-10.
White, G. L. (1981a). A model of romantic jealousy. *Motivation and Emotion*, 5, 295-310.
White, G. L. (1981b). Some correlates of romantic jealousy. *Journal of Personality*, 49, 129-147.

The role of expectancy on the occurrence of envy

Yuji TSUBOTA(*Faculty of Life and Environmental Sciences, Prefectural University of Hiroshima*)

This article reviewed psychological and empirical studies of envy. The author examined questions such as what envy is, what difference there is between envy and jealousy, what structure envy has, what factors elicit envy, and what consequence envy has. Finally, the author discussed the role of expectancy on the occurrence of envy.

Keywords: envy, social comparison, self-esteem, causal attribution, expectancy